

『アスカとアキオの犬人伝説』

作・澤田金太

○都会のパチンコ屋（夜）

漫然とパチンコをしているフリーターの
の亜季男（32）。

タバコに火を点けようとして、

店員「（来て）すみませんお客様こちら禁煙
となっておりますのでおタバコは喫煙所で
お願いします」

亜季男「あ、すみません」

○その外（夜）

店から出てきた亜季男が雑踏を眺め
ながらタバコに火を点ける。
スマホを取り出してディスプレイを
見ながら側溝にツバを吐く。
あくびをする。

亜季男の声「人が故郷に帰るキツカケは
色々ある」

どこからか男の声が聞こえてくる。

声「みーんみんなみんな！ みーんみんな
みんな！」

亜季男はスマホから顔を上げ、声の聞こえてくる店の横手の路地へ恐る恐る向かう。

セミ男の鳴き声とパチンコ屋の騒音が混じり合う奇妙な音空間。路地に近づくとつれてパチンコの音は遠くなり、セミ男の鳴き声が大きくなっていく。亜季男がそつと声の聞こえてくる路地を覗き込むと、そこには電柱にしがみついているセミの鳴き声を発し続ける中年サラリーマンがいる。

無表情に彼を眺め続ける亜季男。

亜季男の声「あれは2015年の夏のことだった」

表情を変えず、亜季男は彼をスマホで写真に撮る。

○T「A…犬の生活」

○マンションの一室

陽光を浴びたカーテンが穏やかな風に揺れている。フロアリングの室内には何も置かれておらず、亜季男は住んでいたこの部屋を今まさに出ようとしているところ。

リュックを背負った亜季男がカーテンを開いてベランダのガラス戸を閉め、鍵を締める。

○マンシヨンの外

路上駐車中の車に寄りかかってスマホで電話している明日香（32）。

明日香「しかしね編集長、でかいネタです。まあ一日辺りざっと一万五千。その程度のアクセスは楽に稼げるはずだ……え、チャット？ いやなに、チャットなんかより電話の方が——」

亜季男がマンシヨンから出てくるのに気付いて、明日香はピュイと彼に口笛を吹く。

それから助手席に回るよう気取った
仕草で合図をする。

表情を引きつらせる亜季男。

○高速道路・明日香の車の車内（移動中）

明日香が運転しながら助手席の亜季男
にまくし立てている。

亜季男はスマホでオカルトサイトに
載っているセミ男の記事を読んでいる。

明日香「因果ということさ、偶然じゃない。

君も知っての通り俺は日本中を取材で駆け
回っているが、その俺がたまたまあの町に
取材に向かうタイミングで君はセミ男の
ネタを俺に寄越して、町に帰ると言った。

科学的な説明は？ 亜季男、君ならこれを
どう説明する？ 実証的に。ロジカルに」

亜季男を指さしてドヤ顔で見つめる

明日香。

亜季男の声「この男は工藤明日香。どう
いう訳か幼稚園からの腐れ縁」

亜季男の声「趣味はオカルト。本人曰くオルタナティブ・サイエンス。まとめサイトだかなんだかに怪しげなオカルト三文記事を投稿して日銭を稼いでいるらしい。要するにデジタル世界のウンコ製造機」

亜季男「危ないから前見ろって前。分かったから」

ムつとしながらも前を向く明日香。

明日香「理屈で説明できないことを別の理屈で説明するのがオルタナティブ・サイエンスさ。そうだ、君は藤子・F・不二雄の『間引き』って漫画を知っているか。発表は1974年。当時世間の関心を集めていた理由なき殺人を題材にした短編だが、

藤子はこれを――」

亜季男の声「よくネタバレをする。聞き

たくなかったら耳を塞いでくれ」

明日香「レミングの集団自殺に喩えて解釈してみせる。人口爆発が叫ばれた時代だ。

ホモ・サピエンスという種を維持する為の

明日香「無意識の機序。集合的無意識が理由なき殺人を――」

明日香が亜季男を見ると手で耳を塞いでいる。

クラクションを鳴らす明日香。

亜季男「（手を離して）いやいや迷惑だから、やめてクラクション」

明日香「君は聞きたくないかもしれないが、世の中にはネタバレをしないと伝えられないこともあるんだ」

亜季男「だとしても今かね。大体その話、

藤子漫画のネタバレ必要ないだろ」

明日香「聞いているじゃないか！」

亜季男「なんで聞いてやったのに怒られるんだよ」

SE…後方から喧しいクラクション

亜季男が振り向くと、普通車が路側帯を猛スピードで走って来るのが見える。

暴走車はそのまま二人の車を追い越して、瞬間、その運転手が二人を睨み

ながら何か聞き取れない怒号を上げて
いるのを亜季男は目にする。

暴走車は相変わらずクラクションを
乱打しながら走り去っていく。

亜季男 「あれには何の理由があるんだ」

明日香 「それは知らん」

○暗い山々を背にした珠閒町の実景

T 「T県・珠閒町」

○国道沿いの居抜きファミレス外観

○その店内

ミヤジ (32) がニコニコしながら

亜季男と明日香を交互に見ている。

気まずそうにドリンクバーを啜る二人。

ウェイトレスがやって来て無言で

フライドポテトをテーブルに置く。

明日香 「あ、どうも——」

ウェイトレスは無視して無言で去る。

明日香「……」

と、ミヤジが二人の前に手を差し出す。

明日香「え、カネ？」

ミヤジ「握手」

明日香「ああ……カネかと思った」

ミヤジと握手する亜季男と明日香。

亜季男「逆にどんなシチュエーションでカネを要求するんだよ。中学卒業以来の感動の再会だぞ。（ミヤジに）なあ？」

明日香「逆にとはなんだ。なんの逆だ」

亜季男「なに、二人は連絡取ってたの？」

明日香「いや」

ミヤジ「お母さんがね」

亜季男「お母さん」

きまりの悪そうな表情の明日香。

ミヤジ「帰ってくるって言うから。明日香の

お母さんから電話もらって」

亜季男「ああ」

明日香「お袋が勝手に電話したんだ。連絡網を掴まれてる。俺が頼んだわけじゃない」

亜季男 「いいよ別にそういうの、面倒臭い」

ミヤジ 「今なにやってんの」

亜季男 「仕事？」

ミヤジ 「そうそう」

亜季男 「何もやってないよ。無職」

ミヤジ 「おー、ロックじゃん」

亜季男 「（苦笑して）ロックかな」

明日香 「俺はウェブキュレーターってところ
だな。オルタナティブ・サイエンスを主に
扱うキュレーションサイトを統括してる」

ミヤジ 「ふうん、そうなんだ」

亜季男 「まとめサイト」

明日香 「まとめサイトじゃないキュレーション
サイトだ。オルタナティブ・トゥルース、
つまり新たななる真実を伝えるニュースメデ
ィアでもある。今回戻ったのも取材でね」
ミヤジ 「へえ、すごいじゃん」

明日香 「なに、取るに足らない取材だ。犬男
って聞いたことあるか？ いや、見たこと
があるかと言うべきだろうな」

明日香「ひと月ほど前からネットで拡散し
だした一本の車載動画。そこには四つん
這いの人間に首輪をつけて散歩をさせる男
の姿が映っていた。プレイか、はたまた何
らかの犯罪か。既に何人かの生放送主や
ユーチューバーは食いついているが、真相
は分かっていない。その動画の撮影場所
こそが俺たちのよく知るここ、珠間町だ」

ドヤ顔でミヤジを指さす明日香。

何の反応も示さないミヤジ。

タバコに火を点ける亜季男。

ミヤジ「ふうん、知らなかった」

明日香「つまり……まあいい。ミヤジ君は
勉強が足りないな」

ミヤジ「出た！」

明日香「なにが」

ミヤジ「懐かしいなあ」

明日香「勉強が足りない、か？」

亜季男「お前なんで分かっているのに一回わか
らないふりするの？」

ミヤジ「もっかい、もっかい」

明日香「（咳払いして）ミヤジ君、勉強が足りないな」

ミヤジ「うわあ！」

明日香「そんなに面白いか」

ミヤジ「うん！ 真似するの流行ってた！」

亜季男「ああ流行ってた流行ってた」

明日香「流行ってたか？」

ミヤジ「いや明日香は知らないよ」

○同・トイレ

連れション中の明日香と亜季男。

亜季男「あんな奴いたっけ。中学だよな？」

明日香「流行ってたのか」

亜季男「まだそれ引きずる？」

明日香「なに、引きずっているんじゃないさ。

ただフアクトが知りたいだけだ」

亜季男「さあ。適当に相槌打っただけだし」

明日香「その言い方はなんだ。だから君たち

は勉強が……」

言いかけて、明日香は口をつぐむ。

亜季男 「めっちゃ気にしてんじゃん！」

○動画サイトの車載動画（夜）

車は周囲に目立った建物も他の通行車両もない、静かな夜道を走っている。しばらくすると道端に設置された何らかの看板が暗闇の中から姿を現す。そこに全裸で四つん這いになって小便をかけている人間・犬男と、その首輪から伸びたリードを犬の飼い主のように手に持って立っている男のボヤけた後ろ姿が一瞬画面に映る。犬男の顔はボサボサの黒い長髪に覆われて、表情を確認することはできない。動画はスローでその場面を反復する。

○その看板の前・製材所跡地（夕）

スマートフォンに映っている動画内の看板と目の前の看板を見比べる亜季男。

看板は荒涼とした印象を与える広い
草地を背に国道沿いに建っている。
草地の向こうには畑と民家が数軒、
その先は御影山の麓、鬱蒼とした森。
錆びてボロボロになった看板には
UFOの絵とイメージキャラクターの
アブダクちゃん、UFO目撃スポット
の記されたマップと「UFOのまち・
珠間町」の文字が書かれている。
その傍らに立った明日香が、

明日香「ここだろ？」

亜季男「ここだな」

明日香「これがトウルースだ」

亜季男「なんか、実物見るとつまらないな」

明日香「ふん、トウルースなんてそんなもの

さ」

亜季男は草地に足を踏み入れて、ぶらぶら歩き回る。

明日香は看板と草地を様々な角度からスマホで写真に撮り始める。

明日香「兵どもが夢の跡、か。知ってるか？
このだだっ広い雑草畑もかつては郡内随一の製材工場だったんだぜ」

錆で顔が不気味に変化したアブダク
ちゃんを見つめる明日香。
生い茂った草が風に揺れる。

亜季男「お前のやってるそれって儲かるの？
まとめサイトのウェブライターって」

明日香「まとめサイトじゃない、キュレー
ションサイトだ。何度言ったら分かる」

亜季男「俺もやろうかな」

明日香「君には無理な話さ。（強調して）
勉強が足りないからな」

何かを踏み、立ち止まる亜季男。

草を手でのけて足下を見ると、キャラクタ―物のストラップが落ちてい
る。何気なく拾うとしげしげと見つめる。
ストラップには血のようにも見える
汚れがこびり付いている。

亜季男「で、いくらぐらい貰ってるの」

明日香「PVに応じた歩合だな。だが一記事あたり最低150円は保証されているよ」

急に振り返って明日香を見る亜季男。

亜季男「安っ！」

明日香「いや、俺は他のライター編集業務も兼務しているから実際はもつと稼いでいるさ。全体の構成案、一次納品された文章の校正、それからHTMLタグ——」

亜季男「お前それ搾取されてるよ。それがトゥルースだろ」

間。

明日香「それはオルタナティブ・ファクトだね」

亜季男「いやいやいや」

○亜季男の実家・玄関く階段（夜）

ドアが開いて亜季男の母が出てくる。

亜季男「久しぶり」

亜季男の母「おかえり。元気してた？」

亜季男「え、うん、まあ、普通に」

亜季男「あれ、意外と反応薄くない？」

亜季男の母「意外ってなによ。お祝いでもして欲しかったの？ あんたもう32でしよ」

亜季男「いやそういうんじゃないけどさ……

まあいいや」

家にかかる亜季男。

亜季男の母「荷物、部屋に置いてあるから」

亜季男「ああ、うん。ありがとう」

居間でテレビを見ていた亜季男の父が振り返って亜季男を見る。

亜季男「ただいま。久しぶり」

父親は何も言葉を返さず、亜季男は少し怪訝な表情を浮かべる。

亜季男の母「ごはん出来てるけど」

亜季男「いいよ、食べてきちやったから」

亜季男の母「お寿司なのに」

亜季男「おいなりさんはお寿司じゃないよ」

亜季男は階段を上がり自室に向かう。

○同・亜季男の部屋（夜）

部屋の入り口に立って引越しのダンボールがいくつか置かれた室内を眺めている亜季男。

ノートや文房具の残ったままの学習机。日焼けして変色したマンガ本やVHSテープの詰まった本棚。ブラウン管のテレビとビデオデッキ。精液の染みの残るベッド。

ダンボールをひとつ引き寄せると、亜季男はそこに座る。

（F・O）

○中学校・教室（夕・回想）

傷だらけになった少年Aが誰かに突き飛ばされて机にぶつかる。

少年の周囲には他の男子生徒たちが輪になっていて、輪の中にはもう一人、傷だらけの少年Bが立っている。

男子生徒1「がんばれー」

男子生徒2「まだ行けるまだ行ける」

疲れ切った様子でしばらく少年Aを眺めていた少年Bは、少年Aが立ち上がろうとしないのを見てその場を去ろうとするが、男子生徒たちが引き留める。

男子生徒1「まあまあまだ早いって」

男子生徒たちから一步引いたところで二人の喧嘩を観戦していたリーダー格の男子生徒が声を上げる。

リーダー格の男子生徒「おい犬」

彼を見上げる少年A。

リーダー格の男子生徒「やっちゃえ」

その声を聞くと少年Aは犬の唸り声をあげて少年Bに近づいていく。

笑う男子生徒たち。身構える少年B。

少年B「いい加減にしろよ……」

少年Bの手に噛みつく少年A。少年Bの叫び声。彼が腕を上げると、何本か指が食いちぎられている。

啞然とする男子生徒たち。その光景を

無表情に眺めているリーダー格の男子
生徒に、少年Aは笑顔を向けて、
少年A「わん！ わん！ わおーん！」

○亜季男の実家・亜季男の部屋

SE…スマートフォンの着信音

ベッドで寝ていた亜季男が寝ぼけ
ながら枕元のスマホを手取る。

亜季男「(出て)お疲れ様です」

明日香の声「やれやれ、まだ仕事気分か。

　　憐れなものだな給与所得者は」

亜季男「お前か。なんだよ朝っぱらから」

明日香の声「朝じゃない。もう正午過ぎだ」

　　スマートフォンの時計を見る亜季男。

　　時刻はもうすぐ13時。

亜季男「ああほんとだ」

　　欠伸をしながらだるそうに身を起こす。

亜季男「めっちゃ寝たわ」

明日香の声「そんなことより早く行くぞ」

亜季男「なにが」

亜季男は通話しながらダンボールを開けて着替えを探し始める。

明日香の声「取材さ。どうせ無職だろ。

手伝ってくれ。カメラマンが必要でね」

何箱か開けるが服は出てこない。

亜季男「別にいいけど、なに、どこで？」

明日香の声「もう来てる」

SE..窓の外からクラクション

亜季男「はええよ。今まだ服探してんだよ」

他のダンボールよりも一回り小さい

ダンボールを開けようとして、亜季男

は手を止める。それだけ他のダンボ

ールと違う郵送伝票が貼られている。

しばしダンボールを見つめ、それから

少し警戒した手つきで、亜季男はダン

ボールを開ける。

中には犬用の骨が入っている。

○同・居間

亜季男の父がノートパソコンをいじ

っているところに、ダンボールを持つた亜季男がやってくる。

亜季男「ねえ」

亜季男の父「ん？」

亜季男「なんか、送った覚えのないダンボールが部屋にあったんだけど」

亜季男の父「送った覚えのない」

亜季男「うん」

亜季男の父は振り返って、

亜季男の父「業者が間違えたんじゃないか」

骨を取り出して父親に見せる亜季男。

亜季男の父「犬の骨？」

SE…外から車のクラクション

○コンビニ

品出し中の店員・小川（26）が

明日香と亜季男に振り返る。

小川「犬男っすか？ いやあ、見たことないっすねえ」

明日香「しかし、話ぐらいは聞いたことがあるでしょう」

小川「そりやありますよ。このあたりじゃ有名だし」

明日香「どういう風に聞きました」

小川「ネットなり友だちなり」

明日香「いえ、つまり話の内容ですよ」

小川「話っていうか、出るっていう。それだけっすよ」

明日香「出る？」

○コンビニ（回想・夜）

犬男の飼い主・幸宏（37）が小川からドッグフードを買っている。

小川「ありがとうございます」

店を出て行く幸宏。小川はレジから身を乗り出して、幸宏の行方を目で追う。店の外のガードレールに繋がれた犬男に幸宏が餌を与えているのが小さく見える。

小川の声「夜に出没するんすよ、コンビニ
なんか。まあそういうプレイなんじゃ
ないすか。気合いの入った変態ですよね。
ご丁寧なガードレールに繋いだりするから、
飼い主が入店するときは」

○コンビニ

明日香「あなた自身は目撃されました？」

小川「(作業に戻り) さっきも言いました
けど、自分はないっすね。この店に来たっ
ていう話も聞いたことないな。え、ミヤジ
さん俺のことなんて言ってたんすか？」

明日香「あなたならそういう話に詳しいと」

小川「(笑い) あー、そういうことか。なる
ほど。あの人すぐそういうこと言うんすよ。
ダメですよ信じちや。なんかすいません」

○天野家の前

高い塀で囲まれ、窓の多くは雨戸の
閉められた一軒家を明日香と亜季男が

見上げている。

明日香「天野克宏、犬男の情報提供者だ。

実は今回の取材は彼からのメールが発端でね。俺の記事の熱心な読者だそうだ。

白状するが、例の犬男の撮影場所もそのメールで知ったよ」

亜季男「死体とかありそう」

明日香「なんてことを言うんだ」

塀にズタ袋がかかっている、でろんと垂れたその口から茶色い液体が滴っているのが亜季男の目に入る。

亜季男「あれ絶対死体入ってただろ」

明日香「いい加減にしろ。否定はできないが

失礼なことを言うな（玄関ベルを押す）」

亜季男「いや否定してくれよ」

○天野家・居間

隅に置かれた物置の横に廃家電やシャベルが放置され、何も掛かっていない錆びた物干し竿が真中に位置する荒廃

した庭が、ガラス戸の向こうに見える。窓際に立った天野（66）は心ここに在らずでその庭を眺めている。

天野「この一帯を木材の供給拠点としてその方向性を決定づけた高度経済成長期は、煎じ詰めれば都市部の繁栄を意味したに過ぎなかった。開発と発展の夢が空疎な空手形でしかない」とこの町の誰もが気付いた頃には地産木材頼りの製材業は下り坂です。けれども慣れ親しんだ環境を変えるだけの余力などもう残されてはいなかった。そうして、レジャーランド建設や原発誘致に活路を見いだすこともできないままに、この町は衰退の一路を辿ったんです」

応接ソファアに座って30分も回っているスマホの音声レコーダー画面を見ている亜季男。

居間をぶらついていた明日香はテレビの横に乱雑に積まれたVHSテープの山の前で立ち止まる。一番上に置かれ

たテープには日付と〈幸宏運動会〉の文字が書かれている。

と、天野は突然振り返り、笑顔で、

天野「親父から恨み節をよく聞かされました。製材職人でね。酒が入ると荒れるんです」

愛想笑いを浮かべて相槌を打つ二人。

天野は片足を引きずって、ゆっくりと応接テーブルの方にやってくる。

天野「潮目が変わったのは80年代初めのことでした。折からのUFOブームが珠間町に古くから伝わる神隠し伝承に新たな光を当てた。アブダクション、ご存知でしょうがUFOの誘拐です。町から出土した土偶が一般に遮光器土偶と呼ばれる亀ヶ岡式だったことも渡りに船でした。ほら、宇宙人みたいでしょう？」

明日香「民間伝承とオルタナティブ・サイエンスの習合はマスメディアのセンサー・シヨナリズムに応えるに充分なものだった。

産業基盤の脆弱なこの町がようやく見つけ

た生き残りの奇策というわけですか」

明日香「UFOの町。宇宙人に会える町」

ソファアに腰を下ろす天野。

天野「チャネリングの聖地……まあ、長くは続きませんでしたわね」

明日香「その遺産が例の事件じゃ宇宙人も浮かばれませんや」

何か引つかかったように明日香を見る
亜季男。

明日香が亜季男の隣に腰を下ろすと、

天野「アブダクションされたんです」

明日香「はい？」

天野「私は犬男はアブダクションされた人間のなれの果てだと思ってる。何年か前にも女子高生が失踪する事件がありました。

アブダクションでしょう。人々はこの町を忘れた。しかし彼らにとってのこの町は今でも重要なコンタクトポイントです」

明日香「エイリアンアニマルですか」

天野「インプラント型でしょう」

怪訝な表情を浮かべる亜季男。

SE…二階から重い鎖を引きずるような音

明日香と亜季男は天井を見上げる。

SE…ドンと床を叩きつける音

ビクツとする明日香と亜季男。

沈黙の後、亜季男は誰に言うでもなく、

亜季男「写真…撮ります？」

笑顔を浮かべ、両手でピースする天野。

○珠間町の各所

以下、いずれも閑散とした、町の様々なアングルからのスナップ映像。

* * *

シャッター商店街の片隅に放置された
アブダクちゃんの等身大人形。

* * *

古いゲーム筐体がまばらに稼働して
いる無人のバッテリーセンター。

* * *

郷土資料館の発掘土器コーナー。

その傍らの子供向け解説板には絵入りで「土偶の正体は宇宙人？」の文字。

* * *

なんらかの呪術的文様が壁にスプレーで描かれた廃ガソリンスタンド。

* * *

中学校の防災行政無線のスピーカー。

SE・・放送開始のジングル

だが放送は一向に始まらず、ややあつて放送終了のジングルが鳴り響く。

明日香の声「犬男か。アメリカにはミシ

ガン・ドッグマンの名で知られるUMAが存在するが、ドッグマンと人面犬に奇妙な共通点があることを君は知っているか。

トカゲ男にカエル男、蛾男モスマンに犬男のドッグマン。アメリカは人獣UMAの宝庫だが、わけてもドッグマンが興味深いのはその独特の伝説成立過程にある。

80年代、一人のラジオDJがドッグマンに関する不気味な曲を制作した。これは

ドッグマンの目撃証言集という体で、DJ
としてはトカゲ男に代表されるアメリカの
人獣UMAをネタにしたエイプリルフール
放送用のジョークのつもりだったが、放送
後に思わぬ反響があった。自分もドッグマ
ンを目撃したという声が局に殺到したのさ。
実は人面犬もこれと類似したバックストー
リーを持っている。それによれば人面犬
伝説はあるお笑い芸人が学生時代、都市
伝説の伝播過程を検証するために流した
創作で、後年そのお笑い芸人と親しいタレ
ントがラジオで真相を暴露したという」

○駅前広場

閑散とした広場の一角にへ捕らわれた
宇宙人〱を模した顔はめパネルが置か
れている。

そこから顔を出しながら語っている
明日香を、亜季男はスマホで写真に
撮っている。

明日香「ふん、出来すぎた話だ。この場合、都市伝説の発祥自体が都市伝説化していると言えるだろう。いずれも2000年代に入ってから発見された新事実とされているのは興味深いところだ。恐怖は今現在にはあらず、過去にありというわけさ」

〈囚われた宇宙人〉の隣に置かれた、犬男と飼い主を象った真新しい顔はめパネルに明日香は移動する。

明日香「だが真偽が疑わしいことは偽であるということじゃない。都市伝説的であるということとは必ずしも創作された物語を意味しない。往々にしてそこには一抹の真実、つまりトゥルースも紛れているものだ」

明日香の写真を撮り続ける亜季男。

明日香「オカルトの語源はラテン語で、その意味は隠されたもの。なんにせよ、この手の話題は一朝一夕には真実が明らかにならないものさ」

亜季男「なんだよそのオカルト番組のエンディングみたいなのやっ」

明日香「なに、これで終わりじゃない」
間。

亜季男「え、取材ってこれだけ？」

明日香「だから言っているじゃないか。オカルトの原義は隠されたもので――」

亜季男「ええ……」

顔はめパネルから出てくる明日香。

亜季男は明日香を尚も撮り続ける。

明日香「だから……亜季男君、勉強が足りないな。考えてもみろ。アポイントメントもなく突然訪れてだ、犬男を見たかと聞かれて正直に答える人間がどこにいる。

写真はもういい」

年配の通行人が二人に怒鳴りかかる。

年配の通行人「写真撮っても何もないよ！」

明日香「ほら……」

写真を止める亜季男。

亜季男「お前にとっての取材はコンビニ店員に絡んで危ないやつの妄想聞いて顔はめパネルで観光写真を撮ることだけなのか」
明日香「だから言ったろう、オカルトの語源は隠されたもので……わかったよ！」
年配の通行人の声「うるさいよ！」

○ファミレス

明日香と亜季男の下にウェイトレスが注文品を持ってくる。

明日香「失礼、実はお姉さんにお伺いしたいことがあるのですが、犬男という……」

明日香を無視して、ウェイトレスは注文のポテトを置くとさっさと去る。

明日香「ほらな」

亜季男「ほらなじやねえよなにがだよ」

明日香「見ず知らずのだ、な？　いくら地元とはいっても高校からは県外だろう俺達はそのれから十数年も帰ってくるこのなかつたこの町は、今や俺達のホームじゃない」

亜季男「(ウエイトレスを眺め) あいつは
単純に愛想が悪すぎるんじゃないか」

明日香「確かに。東京だったらありえない。

田舎ならではの光景だ」

亜季男「そういうのって田舎コンプの上京組
ほど言うんだよ」

明日香「コンプレックスの話などしていない
だろう。俺はファクトを話してる。大体、
君たちはコンプレックスの語を安易に使い
すぎなんだ。元来コンプレックスとは精神
分析の分野で用いられる観念連合のことだ
が……視線を動かさずに奴を見るんだ」

亜季男「は？」

明日香「声がでかい。いいから見ろ。俺の
背後みつつ後ろの席の男。目は動かすな。

視界の端で見ろ」

それとなくその男を見る亜季男。

明日香「これでわかっただろう」

亜季男「何一つわかんねえけど、誰」

明日香「奴がタキオンだ」

間。

亜季男「誰なんだよ」

明日香「おいおい、タキオカンドエ実験チャン
ネルのタキオン氏も知らないのか」

亜季男「知らないけどユーチューバーか」

明日香「正確にはチューバーではなく生放送
主だが、ようやくわかったようだな」

亜季男「いや全然」

明日香「これだから学のない人間は。チャン
ネル登録十万オーバーの事務所ケツ持ち
生主だぞ。奴がここにいるということは、
犬男関連の企画動画がいよいよ本格的に
動き始めたということだ」

亜季男「商売敵って事か。っていうかお前ユ
ーチューバーをチューバーって略すの？」

明日香「今やつはなにをしてる」

亜季男「メニューを見てる。あ、呼び出し
ボタン押した」

明日香「だろいな」

亜季男「あ、さっきのウエイトレスが」

明日香「続けろ」

亜季男「メニューを指して何か話してる」

明日香「それは俺の耳にも聞える」

亜季男「厨房に戻ろうとするウエイトレスに何か声をかけた」

明日香「どうなった」

亜季男「ガン無視された」

明日香「(テーブルを叩く)なんて女だ!」
間。

亜季男「俺たちは何をしてるんだ」

○明日香の実家・明日香の部屋(夜)

スーパーファミコンで遊んでいる

明日香と亜季男。

果物と飲み物の載った盆を持った

明日香の母が入ってくる。

明日香の母「はいはい差し入れてーす」

亜季男「あ、どうも」

明日香の母「大きくなったねえ、亜季男
ちゃん」

亜季男「はあ、すいません」

明日香の母「何年ぶり？」

亜季男「ええと、中学卒業以来なんで……」

明日香の母「お仕事はなにしてるの？」

亜季男「あ、今ちよつと何も」

明日香の母「結婚は？　してるの？」

亜季男「いや、してないです」

明日香の母「あそう。今は大変だもんねえ」

間。

明日香の母「あっちゃん」

明日香「なに」

明日香の母「ほれ、早く食べちやいなよ」

明日香「いま忙しいんだって。見ればわかる

でしょ」

明日香の母「早く食べないと腐っちゃうよ」

明日香「腐らないよ。そんなに早く腐る食べ

物ないよ」

明日香の母「そお？　お母さん知りません

けど」

明日香「いいよもう早く行ってよ。はいはい
ありがとう」

明日香の母「わかったわかった、邪魔者は
出て行きますよ」

しかし明日香の母は笑みを浮かべた
ままその場を動かない。

明日香の母「亜季男くん今年でいくつになっ
たの？」

亜季男「ええと、32です」

明日香「同級生だよ！」

○T「B…火星の生活」

○アパートの一室（夕・イメージ映像）

幸宏がテレビゲームをしながら

フレイムの外にいる女と口論している。

女の声「同じだね。またそうやって逃げるん
だ」

幸宏「誰も誰から逃げてないだろ」

女の声「それを逃げてるって言うんだよ」

幸宏「馬鹿じゃねえの。いいよもう、

話にならねえから」

女の声「話にならねえのはどっちだよ。話のテーブルにっこうともしねえくせに」

幸宏「だからもういいって言ってんだろ。

さっさと出てけよ」

女の声「よくねえって言ってんだよ！」

女の投げた靴が幸宏の背中に
当たる。

幸宏「じゃどうしてほしいんだよ！

これでいいのかよ！ ほら！ ほら！」

部屋に置かれた物を手当たり次第に
女に投げていく幸宏。

SE…玄関の開く音、走り去る靴音

幸宏は玄関を睨み、

幸宏「死ね！ 死ねよクソ女！」

○亜季男の実家・亜季男の部屋（夜）

拾ったストラップを指で回しながら、

亜季男がベッドに横たわって天井を

眺めている。

ふと、本棚のVHSテープに目をやる。

* * *

テープを物色している亜季男。

様々なテープの中から〈囲碁決勝〉と

書かれたテープを手取る。

一本だけ背ラベルの貼られていない

テープが亜季男の視界に入る。

亜季男は特にそれを意識せず、〈囲碁

決勝〉をビデオデッキに入れる。

* * *

テレビから女の喘ぎ声。

録画されたAVで自慰している亜季男。

SE…ドアのノック

亜季男は慌ててチャンネルを変えて

布団に包まる。

亜季男の母「(入ってきて)何やってんの」

亜季男「何もやってないよ」

テレビに映る砂嵐を見て怪訝な表情を

浮かべる母親。亜季男はそれに気付い

て砂嵐に視線を移す。

亜季男「これ壊れてんの？ 映らないけど」

亜季男の母「デジタルチューナー付けてないのに映るわけないじゃない」

亜季男「ああ、そういう……」

○同・居間（夜）

風呂上がりの亜季男が頭を拭きながら冷蔵庫にアイスを探している。

亜季男「なんだよ……」

居間でテレビを見ている父に目をやる。

亜季男「アイス買ってくるけど、なんかついでに買ってくる？」

振り返り、無表情に亜季男を眺める父。

亜季男「え、なにその顔」

亜季男の父「いや、別にいらない」

○辺鄙な道路（夜）

自転車を走らせる亜季男。辺りに目立った明かりも生きた建造物もない暗い

夜道は、どこまでも続くように見える。

○コンビニ・駐車場（夜）

亜季男がやってきて自転車を停める。
広い駐車場の片隅ではヤンキーたちが
が楽しげに騒いでいる。

○その中（夜）

アイスの会計をしている亜季男。

亜季男「あ、ヤンマガってもう来てます？」

○コンビニ・駐車場（夜）

漫画雑誌とアイスの入ったコンビニ袋
を手に店内から出てくる亜季男。

自転車に戻りながらヤンキー達に目を
やると、彼らは何かを囲んで笑って
いる。その隙間から一瞬、首輪をつけ
た四つん這いの人間のようなものが
見える。ギョっとして立ち止まる

亜季男。

その視線にヤンキーの一人が気付き、振り返ってジッと亜季男を見つめる。亜季男は慌てて視線を逸らすと、自転車に乗って足早に去っていく。

○辺鄙な道路（夜）

家に向かって自転車を走らせる亜季男。背後からやってきたワゴン車が亜季男の傍らを通り過ぎる。

と、十数メートル先でワゴン車は停車。

亜季男は自転車を停めて、緊張した面持ちでワゴンを眺める。

間。

ワゴンからミヤジが顔を出す。

ミヤジ「アツキー！ なにやってんの？」

○居酒屋チェーン（夜）

亜季男とミヤジが酒を飲んでいる。

亜季男「飲んで大丈夫なの？」

ミヤジ「大丈夫だよちよつとぐらい。田舎

だから」

亜季男 「そういう問題じゃないだろ」

ミヤジ 「田舎ではそういう問題」

亜季男 「ふうん……いいなあ。なんか人生
楽しそうで」

ミヤジ 「（苦笑）楽しかあないよ。アツキー
は？ なんで帰ってきたの？」

亜季男 「なんで帰ってきたんだらうね。まあ
でも、普通に？」

ストラップを無意識的に弄る亜季男。
ミヤジ 「普通かあ。ねえ俺ってゲイに見え
る？」

亜季男 「え？ なに？ 急に……なにが？
ミヤジ 「ちよつと聞いてみただけ」

亜季男 「ああ……どうかな……そうね……」
問。

亜季男 「別にでも、まあ、そうだとしても
俺そういうの、偏見ないから」

亜季男 「うん、まあ、そうね、うん……」

笑い出すミヤジ。

亜季男 「え、なに、なに？」

ミヤジ 「めっちゃ動揺してんじゃん」

亜季男 「いや、だって唐突すぎるだろ」

ミヤジ 「ウケる」

亜季男 「まあ、まあウケてくれたら良かったわ。なんかほら、傷つけたら悪いからさ。

偏見ないよ？ 人それぞれだからね性的指向は。大丈夫。うん」

ミヤジ 「ああ面白い。そこがアツキーの良いところなんだよなあ」

亜季男 「あそう？」

ミヤジ 「そんなわけねえだろが」

間。

亜季男 「え、なんだよ？ なに？ いいよ別になんでもいいけど」

また笑い出すミヤジ。

ミヤジ 「そう言いふらしてる奴がいるんだよ。

田舎だから」

亜季男 「田舎かあ」

○同・駐車場（夜）

でろんでろんに酔い潰れ、ワゴンの前で吐いているミヤジ。

亜季男はその背中をさすりながらワゴンを眺めている。車体には訪問介護会社のロゴが見える。

○シヤッター商店街（夜）

歩きながら缶ビールを飲むミヤジ。

亜季男は自転車を押しながら、

ミヤジ 「いや絶対酔い覚めないじゃんそれ」

ミヤジ 「いいんだよ覚めなくたって」

亜季男 「はあ……」

空を見上げる亜季男。月は上弦。

ミヤジ 「うわ、月めっちゃ明るい」

ミヤジ 「東京より明るいでしょ。これ田舎の

いいところ」

亜季男 「だなあ」

ミヤジ 「満月はチャネリングの時だ」

亜季男 「へえ」

ミヤジ「へえじゃないだろ。やったでしよう
中坊の頃。ほら明日香と、アッキーと、
俺と田島と、あとほら……」

突然、笑い出して何かを指さすミヤジ。
亜季男が指の先に目をやると、そこに
大人が子供の手を引く図柄の歩行者
専用道路の標識がある。

亜季男「どうした」

ミヤジ「懐かしくない？ うわ、急に思い出
したわ」

キョトンとする亜季男。

ミヤジ「明日香が言ってたじゃん。メキシコ
の……なんだっけ？ なんか有名な宇宙人
の写真とき、あれと似てるつつつて、それ
で明日香がさ、この標識の下には政府の
極秘施設があつて、そこで研究してる宇宙
人がたまたま逃げ出すから標識が立てられた
って言い出して」

笑い転げるミヤジ。

亜季男「あいつ頭おかしいな」

亜季男に缶ビールを差し出すミヤジ。
亜季男はそれをグイと飲む。

ミヤジ「あのビデオ返せよ」

亜季男「ビデオ？」

ミヤジ「あれ、アツキーに貸したんじゃないやな
かったっけ？ いいや、忘れてたらしい」

亜季男「え、何のビデオ」

ミヤジ「なんでもない。なんでもないよ」

亜季男「えなんだよー」

ミヤジ「なんでもないって」

○亜季男の実家の前（夜）

亜季男がふらふらと自転車に乗って
帰ってくる。

○同・玄関く階段（夜）

静かに玄関を開け、照明の落ちた家に
忍び足で入ってくる亜季男。

亜季男「（口の前に指を立てて）シー」

笑いを堪えながら静かに静かに階段

を上っていく。

○同・亜季男の部屋（夜）

音を立てないように部屋に入って
静かにドアを閉める亜季男。

亜季男「任務完了」

ベッドにダイブする亜季男。
大きな息を吐いて、おぼつかない手つきでスマホをポケットから取り出す。
その画面を見ようとして、壁に手をぶつけてスマホを弾き飛ばしてしまう。

亜季男「あ」

ディスプレイに待ち受け画面の光を灯したまま、スマホはフローリングを滑って本棚へ。その光が背ラベルのないVHSテープを照らす。

亜季男「（見て）ビデオか」

立ち上がって近づく亜季男。
手に取って見てみると、正面シールに「47」と殴り書きされている。

* * *

VHSをデッキに入れる亜季男。

亜季男 「エロビか？」

再生が始まる前に慌てて音量を絞る。

亜季男 「危ない！」

テレビ画面に古ぼけたビデオ撮影の映像が映し出される。

* * *

VHSテープの映像――

そこは山中に張られたテントの中で、首に圧迫痕のある中学生男子の扼死体が横たわっている。

テント内はオシロスコープやガイガーカウンターといった機材や雑誌・新聞記事の切り抜き類いで溢れ、少年の傍らには刃こぼれした包丁や錆びた丸鋸などの刃物が整然と並べられている。テントの外からは不快なダイナモの音。少年を撮影する何者かは儀式めいた手つきで包丁を手に取ると、

男の声 「13時25分、調査解剖を開始する」

少年の腹にそつと突き刺す。

男の声 「上腹部の切開」

* * *

呆然とその光景を眺めている亜季男。

男の声 「頭蓋の切断」

SE .. 丸鋸の駆動音、頭蓋の切断音

○アパートの一室（夕・イメージ映像）

物の散乱する床に幸宏が横たわ

っている。ゲームはつけたままで、

室内にその音楽が虚ろに響いている。

SE .. 玄関ベル

横になったまま玄関を見る幸宏。

SE .. 再び玄関ベル

幸宏は立ち上がって玄関に走る。

ドアを開けるとそこには血まみれの

犬男がいて、幸宏を見上げてハア

ハアと呼吸をしている。

幸宏に近づいて、恭順の意を示す

ように足を舐める犬男。

幸宏は呆然と立ち尽くしている。

明日香の声「その男は中学の同級生で、彼は忘れていたが、彼と仲間たちが酷くイジメていた男だった。犬扱いして道端の糞を食うよう命令するなど日常茶飯事だ。その苦境に耐えかねて、男は学校からも自宅からも姿を消した。

付近の山中で変死体が発見されたのはその数日後のことだった。犬にでも食われたかのように損傷の激しいその死体は、公式には遭難して力尽きたハイカーが野生動物の餌食になったものとされているが、発表される事のなかった検屍の結果では、人間の歯形が確認されたそうだ」

犬男が幸宏に微笑んで吠える。

犬男「わん！ わんわん！ わおーん！」

○御影山・荒れた山道

鬱蒼とした森の中を歩いている明日香と亜季男。

明日香「ネットで最も流布してる犬男のバツクストーリーさ。苛烈なイジメ体験の中で自らを犬だと思い込んだ哀れな中学生が、失踪して十数年の時を経て再び姿を現わして、かつてのイジメの主犯格の命令にかつてと同じように従った。つまり、〈死ねよクソ女!〉、イジメの主犯格の恋人を殺したのさ。

イジメの主犯格はそれで精神崩壊、犬男の飼い主になったというわけだ。ふん、創意の欠片もない都市伝説だ」

明日香が息を切らして立ち止まる。

亜季男「(振り返り)もうそこらへんで写真撮っちゃおうぜ。オカルト記事の画像なんて誰も真面目に見ないって」

道の傍らにひっそり佇む水子地蔵を

何気なく眺める亜季男。

明日香「アドバイスはありがたいが丁重にお断りするよ。どうせもうすぐ着く。急ぐぞ。今日は別に取材のアポを取ってある」

亜季男「なんで急に本気になるんだよ。単価150円のクソ記事だろ。たかがウェブライターのくせして」

鬼の形相で亜季男を指さす明日香。

明日香「俺の聞き取り取材にケチをつけたのはお前だろ！ それにウェブライターじゃない！ ミーム・ビークルだ！」

亜季男「新しい単語が出てきたな……」

再び歩き出す二人。

亜季男はその姿をスマホで写真に撮る。

明日香「とにかく現場まで行く。俺の仮説を検証するためには犬男が犬男になった

場所まで行く必要がある。勝手に撮るな」

亜季男「ありやしねえわそんな場所」

明日香「わっはっはっはっは。亜季男くん、君の頭蓋の中は空洞か？」

亜季男「空洞です」

明日香「ゆらゆら帝国のアルバムな。いいよな。そこじゃねえよ！」

亜季男「はい」

明日香「少し頭を働かせれば簡単な話じゃないか。情報変異。ミューテイテッド・インフォメーションだ。あの事件の余波がブラジルの蝶の羽ばたきのように現代に生み出した、セパレート・リアリティさ」

亜季男「今日のお前はいつになく何を言っているか分からないな」

間。

明日香「分からないのは俺の方だ。一体どうした。俺たちがどこに来ているのかも覚えていないのか？」

亜季男「犬男が誰か食ったところだろ？」

無然とする明日香。彼は森の中の仄暗い、不自然に開けた一角を指差す。

明日香「ほら、あそこ」

亜季男は不安げにそこを見る。

○町役場の応接コーナー

ピッチリ撫でつけた髪にピカピカの

青いスーツを着た観光振興課の男・

コブン（32）がソファ―に座って、

神妙な面持ちで明日香と亜季男の取材を受けている。

コブン「痛ましい事件だよ。あの男は僕たちと同世代の少年を殺しただけじゃない。

彼を森の中で解剖して御影山の宇宙人だと言い張った。あまつさえ全国の研究機関に骨をサンプルとして送りつけたんだぜ？

正気の沙汰じゃない。あまりにも残酷だ」

コブンは涙ぐんでハンカチを取り出す。

コブン「明日香、亜季男、今では俺も二児の父だ。あの事件でご両親がどれほど苦しんだことか……もし俺の子供たちが――」

明日香「コブンくん、話の腰を折るようで

悪いが、俺たちが聞きたいのは犬――」

コブン「（急に泣き止んで）観光振興課課長の小宮山文夫です」

明日香「ああいや、失礼、母親がそう呼んでいたものだから……ほら、昔の記憶がアツプデートされないまま残ってるから……」
亜季男「(タバコに火を点け) すいませんねわざわざ、忙しいでしょうに」

コブン「とんでもない、忙しいのは確かだが珠間町に興味を持って貰えるならいくらでも協力するさ。それに明日香くんのお母様の頼みなら断れないしね。取材の話はお母様から聞いてるよ」

明日香「それはどうも……」

コブン「さあ、なんでも聞いてくれ。観光振興課の課長として答えられる範囲でなんでも答えよう」

明日香「いや、だから犬男——」

コブン「それは非常にセンシティブな話題だね。確かにネットの噂話には慎重であるべきだ。だがその反面、町に注目を集める良い機会かもしれない。観光振興課としては是々非々といったところだね」

デフォルメされた犬男とその飼い主の
着ぐるみを来た高校生二人が、頭の部
分だけ外して、ぐったりして通路を横
切るのが明日香と亜季男の目に入る。

コブン「（咳払いして）お前たちの言いたい
ことはわかる」

明日香「いや、別になにも——」

コブン「けどな、明日香、亜季男、俺も
今では二児の父だ。あの男が殺したのは
少年だけじゃない。UFOの聖地になる
はずだったこの町の未来も殺したんだ。

今の珠間町にあるのは廃墟とゴロツキ連中
ぐらいなものさ。俺は未来のない町で子供
たちを育てたくはない。分かるだろ？
そうだ今晚、ウチへ来ないか？」

○コブンの家・居間（夜）

食事中的コブン夫妻と明日香と亜季男。

コブンがはしゃぐ子供たちに箸やフォ
ークで突かれているのをコブンの妻は

にこやかに、明日香と亜季男は無表情に眺めている。

コブン「あはは、ほーら、座ってごはんを食べなさい。ほーら。だーめ。イタタ。痛い痛い。座りなさい。お父さん怒っっちゃうぞ。イタタ。ほーら。血が出てきたから。やめなさい。ちよつと本当に、血が出てきちゃったから」

○同・庭（夜）

ビーチチェアに座って夜空を眺めているコブンと明日香と亜季男。

コブン「（缶ビールを飲み）懐かしいなあ。思い出すよ、お前らとやったチャネリング。あの時もこんな夜だった」

明日香「そうだったかな」
コブン「おいおい、張本人が忘れてどうする。お前以外に誰がUFOを呼び出そうとするんだっつーの。ミスターチャネリング」
笑って明日香を小突く酔ったコブン。

無表情の明日香。

明日香「正確にはチャネラーかな」

コブンの話を聞いていない亜季男。

ビールを飲みながらふと家の方に目をやると、死んだ目をしたコブンの妻が無表情にコブンの背中を眺めている。

コブン「そうだ、それでいこう。VRを駆使したチャネリング・パークを建てるんだよ。なあ！ 名案だろう！ 明日香には施設全体の監修をしてもらおう。世界初のチャネリング・パーク。珠間町から世界へ。いや、宇宙へ……」

○明日香の車（夜・移動中）

運転席に明日香、助手席に亜季男。

亜季男「お前、あいつのこと覚えてる？」

明日香「お前は」

首を傾げる亜季男。

明日香「少なくとも、あんなにウザい奴はいなかったな」

○亜季男の実家・玄関く居間（夜）

亜季男が帰ってくると、暗い居間から
小さなテレビの音が聞こえてくる。

訝りながら居間に入っていく亜季男。
そこにはソファ―に座ってうな垂れる

亜季男の父がいる。

亜季男「大丈夫？」

亜季男の父「（ゆっくり振り返り）ああ、
おかえり」

亜季男「なんか、医者とか……」

亜季男の父「睡眠導入剤の副作用だよ。さっ
き飲んだばかりだから」

亜季男「ああ……じゃ、先、寝るわ」

亜季男が居間を出ようとすると、

亜季男の父「亜季男、お前どうして戻って
きたの？」

亜季男「そんな言い方ないだろ」

亜季男の父「いや、そういう意味じゃない。
ほらあの後でお前、あんなにここから出た
がってたから」

亜季男の父「それで高校も県外の全寮制
がいいって——」

自嘲するように笑う亜季男の父。

亜季男の父「なんでもない。俺も寝るよ。
おやすみ」

居間を出て行く亜季男の父。

一人、その場に取り残される亜季男。
テレビを見つめる。

亜季男「どうして戻ってきた……」
じつと見つめる。

* * *

(フラッシュ) ——

幸宏に笑顔で吠える犬男。

解剖ビデオの映像、音声。

コンビニ前で何かを囲んで笑って
いるヤンキーたち。

森の中を指さす明日香。

木にしがみついて鳴いているセミ男。

VHSラベルの〈47〉。

ミヤジの声「ビデオ返せよ」

* * *

突然、踵を返す亜季男。

○ファミレス（夜）

立ったままテーブルに（47）のVH
Sテープを叩きつける亜季男。

その席に座っていた明日香とミヤジが
亜季男を見上げる。

ミヤジは髪を金髪に変えている。

亜季男「（ミヤジ見て）これだろ」

ミヤジ「え」

亜季男「この前言った借りたビデオ」

ミヤジ「……これ？ あれ、こんなだっけ」

明日香「一体なんなんだ、牛がキャトルミュ

ーテイレーションされたような顔して」

亜季男「なあ俺なにやったんだよ。覚えて

ないんだよ。これか？ 俺はこれに関係

してるのか？ 俺たちか？」

間。

明日香がテープを掴んで引き寄せる。

明日香「47、タイトルは〈児童解剖〉。

昔アダムスキーで借りたよ。悪趣味なスプラッターだろ？ ロズウェルの宇宙人解剖ビデオに便乗した時代の徒華。フェイク・ドキュメンタリーの先駆けさ。

君が持ってたのか。どうりで見当たらないと思った……しかし懐かしいな」

ミヤジ「事情がわかんないけど、前に言ったのは椎名へきるのライブビデオなんだけど……それはやっぱ、無いの？」

明日香とミヤジを交互に見る亜季男。

スマートフォンをいじっていた明日香がその画面を見せる。

明日香「ほらこれだろ？ 中古でプレミアがついてる。貴重なんだよこのビデオ、例の事件で犯人の自宅から見つかってメーカー自主回収になったから。もったも、これはダビングだが」

ミヤジ「なに、どうなってるの？」

明日香の横に座る亜季男。

亜季男 「ちよ……ちよつと整理させてくれ」

ミヤジ 「うんうん、整理して整理して。こんな夜中に呼び出した理由をさ」

明日香 「そうだな」

亜季男 「思い出せないんだよ」

ミヤジ 「なにが」

明日香 「そうだな」

亜季男 「中学の頃の記憶が」

ミヤジ 「ああ」

明日香 「なるほど」

亜季男 「それで……その頃この近辺で例の

殺人事件があつたんだろ？ （明日香に）

宇宙人呼ばわりされてイジメられてた中学生がさ、知り合つた宇宙人マニアの変質者に殺されて、解剖されて——」

明日香 「俗に言う御影山チャネラー少年殺人事件。なんだ、君にしては妙に食いつきがいいじゃないか。俺はそれが犬男伝説の原型だと考えているよ。津山三十人殺しのファクトが八つ墓村という——」

明日香「フィクションを生み、八つ墓村が杉沢村や犬鳴村といった派生的ネットロアを生み出したのと同様の構図さ。情報のアグロメレーションがもたらした典型的なミューテイションさ」

亜季男「いや、いや、それはいいんだけど、だから、その殺された彼をさ、イジメて追い込んだのって俺たちなんじゃ……」

ミヤジ「学校違うじゃん」

明日香「学校も違うし知り合いでもない。

いったい何を言い出すんだ君は」

亜季男「それは……信じられるのか？」

明日香「信じるも信じないもない。通学の事実を学校に照会するなり卒業証書を押入れから引っ張り出すなりすればいいだけの話だ」

間。

亜季男「じゃあなんで俺は忘れてるんだ、あの頃を」

ミヤジ「失恋のショックとかじゃないの？」

何かあった風の別れ方してなかったっけ」

亜季男「失恋？」

ミヤジ「それ、修学旅行の時に田島と買ったお揃いのやつじゃん。まだ持ってたんだ」

ミヤジの視線を追って亜季男が手元に視線を落とすと、その指は無意識にストラップをいじっている。

○亜季男の部屋（1998年・夕）

ゲームをしている中学生の亜季男の

背後でベッドに座った中学生の田島が俯いている。

中学生田島「同じだね。またそうやって逃げるんだ」

中学生亜季男「誰も誰から逃げてないだろ」

中学生田島「それを逃げてるって言うんだよ」

中学生亜季男「馬鹿じゃねえの。いいよもう、話にならねえから」

中学生田島「話にならねえのはどっちだよ。
話のテーブルにつこうともしねえくせに」
中学生亜季男「だからもういいって言ってん
だろ。さっさと出てけよ」

中学生田島「よくねえって言ってんだよ！」

中学生田島の投げたVHSテープが
中学生亜季男の背中に当たる。

激昂した中学生亜季男は立ち上がって
中学生田島にゲームカセットを投げ
つける。

中学生亜季男「じゃ死ね！ 死ねよクソ

女！」

中学生亜季男を睨みつける中学生田島。
やがて、怒りの形相で部屋を出て行く。

○ファミレスの外（夜）

自転車に乗って帰ろうとする亜季男。

ミヤジの声「アッキー」

振り返る亜季男。

ミヤジ「ごめん、忘れてた。これ返すよ」

星新一『ボッコちゃん』の文庫を差し出すミヤジ。

亜季男 「(受け取って)これ？」

ミヤジ 「貸してくれたじゃん、中学のとき」

亜季男 「そうだっけ」

ミヤジ 「本当に覚えてない？」

亜季男 「うーん」

ミヤジ 「宇宙人に誘拐でもされたんじゃないの？」

亜季男 「ははは」

ミヤジ 「アッキーさ、コブンと会った？」

亜季男 「え？ ああ、うん、あ、明日香が言ってた？」

ミヤジ 「(笑) あいつは俺には何も言わないよ。でも狭い町だから。どうだった、コブン。なんか言ってた？」

亜季男 「さあ……この町はゴロツキばかりだとかなんとか」

乾いた笑いを漏らすミヤジ。

ミヤジ「そうかそうか。じゃさ、今度会った
ら伝えといてよ。俺がごめんって言った
って」

亜季男「え、なに、そこ何かあったの？」

ミヤジ「田舎だからね」

亜季男「あ、そ……わかった、言つとくよ」
間。

亜季男「じゃあ」

ミヤジ「またね」

亜季男は自転車で行く。

その背中を無表情に眺めるミヤジ。

○コンビニ（夜）

小川に缶ビールの会計をしてもらい
ながら、亜季男はスマホを弄っている。
明日香の顔ハメ写真や山中で撮った
写真を明日香にメールで送る。

○明日香の実家・明日香の部屋（夜）

ノートパソコンで記事を執筆している

明日香。

デスクに置いたスマホがメールを受信。

明日香はスマホを手取る。

○コンビニ（夜）

小川「あ、見つかりました？」

亜季男「はい？」

小川「犬男、探してなかったでしたっけ」

亜季男「ああ……あれはもう済んだ話なん
で」

小川「しよせん都市伝説っすか」

亜季男「みたいですねー」

○その外（夜）

亜季男が出てくると、以前のヤンキー

たちがまた来ていて、大笑いしながら

Tシャツを着た大型犬と戯れている。

亜季男はそれをボーッと眺める。

○明日香の実家・明日香の部屋（夜）

送られてきた写真をスマホで見て
いる明日香。写真に不満げな表情。

明日香「これだから素人は……」

○辺鄙な道路（夜）

自転車を押して缶ビールを飲みなが
ら歩いている亜季男。

空を見上げると満月が出ている。

亜季男の声「酒を飲みながら歩いていて、
ふと思い出した。彼女は中絶した。それ
から俺は、彼女を見ることをやめた」

○製材所跡地・看板前（夕・1998年）

中学生亜季男と中学生田島が自転車を
押して無言で歩いている。UFO看板
の前まで来ると、

中学生田島「（立ち止まり）墮ろしてきた」

立ち止まって振り返る亜季男。

中学生田島「墮ろしたと殺したって、同じ

ように聞こえない？」

中学生亜季男「……聞こえるな」

中学生田島「ガキの死体は医者から貰って

埋めてきた」

中学生亜季男「そんなわけねえじゃん」

中学生田島「本当だよ。ほら、あそこ」

田島は草地のどこかを指さす。

○製材所跡地・看板の前（夜）

月明かりの下、夜風にそよぐ草地を

眺めている亜季男。

ふと、ポケットからストラップを

取り出し、しばし眺めて月にかざす。

亜季男「チャネリングか」

○明日香の実家・明日香の部屋（夜）

山中で撮った写真を見ている明日香。

明日香「これは使えるか……ん？」

と、何かに気付いて画像を拡大する。

明日香「そんな……バカな！」

画像の背景の森の中に木々に隠れて

こちらを眺める、ボサボサの長い髪で
顔面を覆った裸の人間のようなものが
小さく、ぼんやりと映り込んでいる。

○製材所跡地・看板の前（夜）

男の声「わん！」

驚き、声のした方を見る亜季男。

（画面暗転）

○T「C」オルタナティブな生活」

○御影山・山道（夜・1998年）

制服の背中にチョークでリトルグレイ
の落書きのされた少年Aが泣きながら
とぼとぼと歩いている。

水子地藏を通り過ぎて、ふと木々の
裂け目から空を見上げると、満月。

しばらく月を眺めていると、森の中
から無線のノイズとダイナモの駆動
音が聞こえてくることに気付く。

音のする方に目をやる少年A。

森の開けた一角に、カンテラの明かりのともったテントが見える。

明日香の声「犬男の都市伝説はなにも新奇なものではない。有名どころではミシガン・ドッグマンがまさにそうだろう。日本における犬男といえばやはり人面犬だ。

あるいは、犬ではなく牛男とでも言うべきだろうが、江戸時代の妖怪クダン。動物と人間の混合生物は民間伝承では珍しいものではないが、クダンがそれらと一線を画すのは口承ではなく瓦版というマスメディアでその存在が知れ渡ったという点だ。その点でクダンは都市伝説UMAの先駆けと言える。

ドッグマン、人面犬、それにクダン。名称は違うが、いずれもこう言い換えることができるだろう。マスメディアが生み出した情報妖怪。あるいはコミュニケーションを求める声ならぬ声の孤独な集積が形作る、妄想のブロッケンの怪物」

○ファミレス

ノートパソコン画面――

ブログ執筆画面に先の独白台詞が書か
れている。

* * *

書く手を止めてコーヒーを飲んでいる
明日香。

ふと窓から外を見ると、相変わらずの
寂れた風景が広がっている。

ノートパソコンで記事を書き始める。

明日香の声「前置きはこれぐらいにして

おこう。さて、どこから話を始めようか」

(以下、回想)

○明日香の家・明日香の自室 (夜)

スマホの画像を見て驚いている明日香。

明日香「そんな……バカな！」

部屋の外から母親の声。

明日香の母の声「あっちゃんどうしたの？」

明日香「なんでもない！ 今忙しいから話し

かけないで！」

明日香の母の声「もう遅いよ。早く寝なね」
明日香「これ終わったら寝る！」

○亜季男の実家の前

車のサイドウインドウから身を乗り
出して、クラクションを鳴らす明日香。
亜季男の父が窓から顔を出す。

明日香「こんにちは」

亜季男の父「どうも」

明日香「亜季男くん居ますか。電話しても
出なくて」

亜季男の父「いないよ。昨日から帰ってない
みたい」

○ファミレス

席に座って呼び出しベルを押す明日香。
ウエイトレスが来て、

明日香「ドリンクバーお願いします。あの、
お姉さん、いつも僕と一緒に来てる——」

ウエイトレスは無言で去って行く。

○町役場・応接コーナー

苛々した様子の明日香の前でコブンが大仰な身振りで驚く。

コブン「亜季男が消えた！？　なんてことだ。まさかこの平和な町で——」

○アパート・廊下

〈宮地〉の表札の下の玄関ベルを押す明日香。中から返事は返ってこない。途方に暮れて駐車場を眺めると、訪問介護会社のワゴンが停まっている。

○明日香の車の中（移動中）

運転しながら独り言つ明日香。

明日香「一体どこへ消えたというんだ……

まさか犬男が……いやいやいや！」

屋根に設置されたUFOのオブジェが目を引く道路沿いの平屋店舗廃墟に、明日香は視線を留める。

明日香「あれは……」

○廃墟のビデオレンタル屋の前

車を停める明日香。

外に出てその廃墟を眺める。

廃墟の朽ちた看板には「レンタルビデオ・アダムスキー」とある。

SE…レジスターの音

○アダムスキー店内（タ・1998年）

中学生の明日香がホラーコーナーのビデオの裏表紙を見ている。

店員の声「またどうぞー……」

何気なくレジの方を見る明日香。一人の金髪男子中学生が何かを借りて、外に出て行くのが一瞬だけ視界に入る。彼は中学生のミヤジである。

○明日香の車の中

ドアが開いて明日香が入ってくる。

彼は車内に何かを探し、やがてシートの下に「47」のビデオを見つける。

〈47〉を見つめる明日香。

○アダムスキー店内（夕・1998年）

カウンター内に座って小さなテレビでゲテモノビデオを見ている店員。

中学生明日香「（来て）あの」

店員「はい」

中学生明日香「（小声で）児童解剖……」

店員「え、なに？」

中学生明日香「児童解剖っていう……」

店員「ああ児童解剖？ あるよ」

中学生明日香「いや」

店員「借りないの？」

中学生明日香「いや……」

店員「一週間五千円。他のとこ置いてないから。本物のスナッフフィルムだからね」

躊躇う明日香。やがて、財布から五千円を出してカウンターにそっと置く。

店員は足元から〈47〉のテープを取り出してカウンターに手荒に置く。

〈47〉をじっと見つめる明日香。

店員「オマケで裏つけてあげようか？ 裏。

君達みたいな中学生の五千円大金でしょ」

○明日香の車の中

まだ〈47〉を見つめている明日香。

明日香「47……47……」

* * *

(フラッシュ)――

天野の家の居間にあるVHSテープの
山にホコリの積もった〈46〉が紛れ
ている。

* * *

明日香「(顔を上げて) 46……」

○天野家の前へ玄関先

門前に立って家を見上げている明日香。

玄関ベルを押す。

インターホンに返事はない。

門に手を掛けると、軋みながら開く。

明日香「ごめんくださーい」

静まりかえった家。明日香は警戒しながら、そろそろと玄関に近づく。

明日香「どなたかいらっしやいますかー」

玄関脇のベルを押すが、やはり応答らしいものはない。

外開きの玄関ドアのノブを掴む明日香。引くと、ドアは少し開く。

明日香は束の間固まるが、やがて、ゆつくりと玄関ドアを開けていく。

明日香「（小声）天野さーん……いらっしやいますかー……いないならいないと——」

と、玄関ドアの内側にもたれかかっていた、コンビニ前のヤンキーの一人の刺殺体が、ゴロリとドアの隙間から現れる。

ぴよんと一歩引いて尻餅をつく明日香。

明日香「うおおお！ ええええ！？」

開いたドアから家の中を見ると、廊下にもヤンキーの刺殺体が転がっている。

明日香「いやいやいや嘘でしょ……なに？

なんなの……？ ええええ……」

と、物置のドアに何かがドシンとぶつかるような音が聞こえてくる。

座ったまま飛び上がって、音のした

裏庭の方に目をやる明日香。

音は断続的に聞こえてくる。

明日香「よし……わかった……ファクトだ。

俺はファクトを追い求める男……」

へっぴり腰で立ち上がり、壁に立て

かけられたシャベルを武器代わりに

手に取り、構える。

明日香「キュレーションサイトの帝王……

SEOの魔術師……」

* * *

裏庭――

明日香「オルタナティブ・サイエンス・エン

ターテイナーだあ！」

叫びながら物置のドアを開ける明日香。

そこにはズタ袋の上からロープで縛られ、猿ぐつわを巻かれた、頭部の打撲傷から血を流した亜季男がいる。

明日香「あ」

長いあいだ頭で扉を打ち続けていた亜季男は、明日香を目にするとバタリとその足元に倒れ込む。

その場を動けない明日香。

と、居間の方から微かにテレビの音が聞こえてきて、明日香はガラス戸越しに居間を見る。

そこには録画したUFO特番を見ながら食事をしている天野がいる。

○同・家の各所

家の至る所にヤンキーたちの刺殺体が転がっている。

トイレの便器に顔を埋めた死体。応接ソファーに横たわる死体、勝手口のドアノブに手をかけたままの死体。

頭を下にして階段にあお向けになつて
いるのは小川の死体。

○同・天野幸宏の部屋

壁に大きなチェーンの固定具。そこ
から伸びたチェーンの先には使い込ん
だSM用の首輪が付いている。

その傍らにできた血溜まりには山刀を
手にしたミヤジの死体と幸宏の死体、
食べかけの犬の餌皿と黒髪長髪のカツ
ラが転がっている。

明日香の声「警察発表によれば、天野氏の宅
で殺害された内の一人、天野幸宏氏は八年
ほど前に訪問介護の仕事を辞め、自室に
こもるようになった。私がインタビューを
行った幸宏氏の父・克宏氏はそれ以前から
彼とは折り合いが悪かったが、以来幸宏氏
の私室が彼の仲間たちの溜まり場となった
ことで、より一層疎遠になってしまった
ようだ」

明日香の声「そしてあの夜、いつものように部屋で騒いでいた幸宏氏の仲間の一人が、突然刃物を手に無防備な他の仲間たちを襲い始めた。それがミヤジだった」

○天野家・勝手口へ階段（事件当夜）

勝手口がボタンと開いて、庭にいたミヤジが顔を出す。

ミヤジ「良平ごめん、ちよつと来て」
良平と呼ばれたヤンキーが青い顔をして台所からやってくる。

ミヤジ「ちよつと来て、ちよつと来て」
良平を手招きして庭に消えるミヤジ。
着いていく良平。

居間からバラエティ番組の笑い声が聞こえてくる。

間。

再び勝手口から顔を出すミヤジ。

ミヤジ「たつつんいるー？ たつつん」

SE…ドタバタと階段を降りる音

たつつんと呼ばれたヤンキーが急いで二階からやってくる。

たつつん「なんすか」

ミヤジ「そんな怖い顔すんなよお前」

たつつん「すいません」

ミヤジ「シヤベルないんだよね、さつきから探してるんだけどさあ」

たつつん「幸宏さんの親父さんに聞いて

きましようか」

ミヤジ「いや、いい、いい。迷惑かかるじゃん。一緒に探そ」

たつつん「あ、はい」

ミヤジと共に庭に出て行くたつつん。間。

血まみれのたつつんがかすれた悲鳴を上げながら、勝手口に戻ってくる。

その後ろからミヤジが現れて何度も背中を山刀で突き刺す。

動かなくなるたつつん。

死体を跨いで家に入っていくミヤジ。

居間にいる天野が呆然と血まみれの
ミヤジを眺めているのが目に入る。

二人の目が合う。

小川の声「(二階から) 達也くん? なんか
あった? 達也? おーい」

天野を無視して二階に上がっていく
ミヤジ。

SE…二階からドタバタともみ合う音

小川が階段を転げ落ちてくる。

小川「やめて下さいよ……やめ……」

ミヤジがやってきて、階段にあお向け
に倒れた小川を滅多刺しにする。

○警察署の取調室

天野を見つめている刑事Aと、その
傍らで捜査資料を読んでいる刑事B。

しばらく沈黙が続いて、それから、
刑事A「鑑識の方でも結果は出てますし、
状況証拠から見てもあなたが犯行に関与
したとは考えていません」

刑事A「お聞きしたいのは――」

天野「犬を飼っていたんです」

刑事A「……犬ですか」

天野「ええ、あの子はそう言いました。部屋で犬を飼うと」

苦い表情を浮かべる刑事A。

刑事B「我々としてはあの部屋で人間が監禁されていた可能性を考えているんですが」

刑事Bが顔を上げ、写真を一枚見せる。そこには平凡な長髪の女子高生が映っている。

刑事B「彼女、見覚えはありませんか」

写真を覗き込む天野。

刑事A「幸宏さんと交際されていたそうです。幸宏さんが職を辞された八年前に行方不明者届が出されました。彼女はまだ見つかっていません」

刑事B「それ、本当に犬だったんですか」

顔を上げて、空虚な眼で刑事Bを見つめる天野。

○ネットの生配信動画・御影山・山中

動画タイトルは「消えた犬男を捜してみよう放送」。再生数は50万程度。

内容はタキオンが犬男を捜すもの。

森の中に動物に食い荒らされた猪の腐乱死体が転がっている。

それをアップでカメラに写すタキオン。

タキオン「うーわ、きーも。なにこれ。これ犬男に食われたんじゃないの。これ犬男に食われたんじゃないのこれ！」

明日香の声「状況証拠からすればあの晩殺害された誰かが犬男だったと考えるのが妥当だろう。閉鎖的な環境が生んだ異常な露出プレイ。経緯は不明だがそれが虐殺に繋がった。だが異説もある。あの家には犬男が監禁されていて、事件に乗じて脱走したか、あるいは彼こそ真犯人だという説だ。その説に従えば我が友人・Aは犬男の存在を知ったが為に拉致されたということになる」

明日香の声「これらの真偽は不明だが、今のところ分かっているファクトもある。タキオン氏の動画は動物の命を弄んでいるとして炎上、その後動画は削除された。犬男の正体については決定的な証拠はない。事件と関係があるとされる失踪した女子高生の行方は不明のまま。そしてAがなぜ事件に巻き込まれたのかは、彼自身にも分かっていない」

* * *

(フラッシュ)――

犬男の鳴き声に振り返る亜季男。
その瞬間、彼は何者かに金属バットで頭部を殴られ、意識を失う。

(回想、終わり)

○ファミレス

タイプする手を止めて顔を上げる

明日香。

明日香「そういうことでいいんだろ？」

明日香の向かいには頭部に包帯を巻い

た亜季男がいる。

亜季男 「(メニュー見ながら) そういうことも何も実際にそうなんだよ」

気取った仕草でOKを示す明日香。

明日香 「まあ、なんでも好きなものを頼め。

今日は俺のおごりだ」

亜季男 「それファミレスで言う台詞か？」

明日香 「それこそ奢られる側が言う台詞じゃないだろ！」

亜季男 「どこでキレルんだよ……」

呼び出しベルを押す亜季男。

ややあつてウェイトレスが来る。

亜季男 「すいません、ドリンクバーと、

季節のサラダと、大盛りポテトフライと、ミックスピザと、チーズ盛り合わせ——」

記事をタイプしながら亜季男を睨みつけている明日香。

亜季男 「じやいいよ自分で払うから」

明日香 「俺がおごると言っているんだ」

亜季男 「じや難癖つけるなよ」

明日香 「誰がいつ難癖をつけた」

言葉を失う亜季男。

ウエイトレスを見て。

亜季男 「すみません、今のキャンセルで、

(メニュー指して) ここに載ってるの全部

ください」

明日香 「待て！」

間。

明日香 「せん……500円以内で……」

冷ややかに明日香を見つめる亜季男。

亜季男 「やっぱドリンクバーだけでいい

です」

去って行くウエイトレス。

表情に敗北感を浮かべる明日香。

亜季男 「何がしたいんだお前は」

明日香 「……お前こそ、何がしたいんだ。

いや、何がしたかった。この町で」

亜季男 「うーん？」

明日香 「俺には取材という明確な目的が

ある。お前は何だったんだ、結局」

亜季男 「そうなあ、田島に一言謝りたかった
のかもなあ」

明日香 「田島にか」

亜季男 「でもまあ、今はどこにいるのか
わからないし」

明日香 「フェイスブックにいるぞ田島」

亜季男 「あ、いるんだ」

明日香 「このあいだ結婚した」

亜季男 「結婚してんだ」

明日香 「相手はIT社長だ」

亜季男 「IT社長行っちゃった」

明日香 「新婚旅行はクルーズだ」

亜季男 「クルーズとか行っちゃった」

明日香 「虎ノ門ヒルズに住んでる」

亜季男 「金持ちかよ」

明日香 「俺がフレンド申請しておくか？」

亜季男 「いやあ、いいよ」

明日香 「実はもうしてある。お前のことを

メッセージで送ったら久しぶりだから今度

ご飯でも行こうと言っていたよ。ほら」

フェイスブックの開かれたノートパソコンの画面を亜季男に見せる明日香。

亜季男「え、二人だけで？」

明日香「ああ、なぜか俺が入ってないんだ」

亜季男「なんかごめんな」

明日香「逆にそういうのやめろ」

○亜季男の実家・居間

来た時と同じリュックをイスに置いて、『ボッコちゃん』を読みながら母親と

食事をしている亜季男。

亜季男の母「包帯取れるまでは居れば？」

亜季男「急に予定入っちゃったから」

亜季男の母「住むところはあるの？」

亜季男「東京なんだからいくらでも見つかるよ。あ荷物はそのうち取りにくるから」

亜季男の母「事前に連絡してね。お母さん

日中は家空けてるから」

亜季男「そうする。そういえば、お父さんてなんか病気にしてんの？」

亜季男の母「うつ病で休職中」

亜季男「言ってくればよかったのに」

亜季男の母「あんたに話したってどうにもならないじゃない。仕事もしてないのに」

亜季男「無職は関係なくない？」

SE…玄関ベル

席を立とうとする亜季男を、亜季男の母は制して、

亜季男の母「先食べちゃって、片付け遅くなるから」

玄関に向かっていく。

亜季男の母の声「はい」

SE…玄関ドアの開く音

亜季男の母の声「あら、明日香くん」

食べながら玄関の方を見る亜季男。

明日香の声「こんちは。あの、亜季男くん
って……」

亜季男の母の声「うんいますよ。ご飯食べてる。何か食べていきます？」

明日香の声「ちよつと失礼」

明日香が部屋に入ってくる。

亜季男 「来るの早くない？」

明日香 「これを見ろ」

封筒とVHS-Cテープを亜季男に見せる明日香。

明日香 「さつきポストに入っていたんだ」

封筒を手に取って眺める亜季男。

裏返すと差出人の記載はない。

表の宛名書きを見る亜季男。

* * *

(フラッシュ) ——

骨の入ったダンボールの郵送伝票。

その字は封筒のそれとよく似ている。

* * *

亜季男、明日香と顔を見合わせる。

○亜季男の実家・亜季男の部屋

VHS-Cアダプターにテープを装着、
デッキに入れる亜季男。

亜季男と明日香はテレビ画面を眺める。

明日香「よく残っていたな、そんなもの」

亜季男「いつの間にか見なくなったよな」

明日香「ミニDVがシェアを奪ったからな。

VHSの時代は短かった」

亜季男「これミニDVじゃないんだ」

明日香「似ているが違う」

映像が始まり、テレビから中学生男子

たちの声が聞こえてくる。

男子1の声「ほら、来た来た」

男子2の声「いやいや、無理だから」

男子3の声「(笑)」

男子1の声「行けって。ホラ」

男子2の声「……じゃあ、行くぞ！ ……」

なんつってね」

男子3の声「(笑)」

男子4の声「ハア？」

沈黙する男子たちの声。

揉み合うような音。

男子1の声「やめとけって。ミヤジやめとけ。

行くから。なあ？ コブン行くよな？」

男子2の声「……」

男子4の声「早くオナニー見せてこいよ。

好きなんだろお前あの女。愛を伝えろ。

男になれ。俺たちがビデオに撮つといてやるから」

男子たちのやりとりは続く。

画面を見つめる二人の仏頂面。

明日香「ガキは残酷なことをする」

亜季男「他人事」

明日香「現に他人事だ。俺はこんなビデオが

あったことすら知らん。お前は違うのか」

亜季男「どうだろうな。見たような気もするし、見なかったような気もするし」

間。

明日香「探偵ナイトスクープの有名な依頼に、

町の至る所にビニールテープを巻き付ける

犯人を探す依頼がある。知ってるか？」

亜季男「知らない。見ないし」

明日香「結局取材中に犯人は見つからなかった。その後スタジオで探偵のトミーズ雅は

再調査の依頼を番組では受け付けないと説明していたが、俺はあの判断は正しかったと思ってるよ」

亜季男「あ」

テープがデッキの中で絡まり、映像が止まってデッキから吐き出される。

亜季男「(テープを引き出し) ああ、ダメだなこりゃ。捨てるか」

テープをゴミ箱に捨てる亜季男。

二人、ゴミ箱を見つめて、

明日香「なんで送ってきたんだろうな」

亜季男「捨て方がわからなかったんだろ。」

燃えるゴミか、燃えないゴミか」

○駅前の個人経営コンビニ兼土産物屋

棚に並ぶ犬男グッズの数々が手書きの値札で半額になっている。

その光景をソフトクリームを食べながら眺めている明日香と亜季男。

明日香「(一つ手に取り) 犬男ストラップ」

亜季男 「ふざけんな」

明日香 「一度失った夢は戻らないものだな。

犬男煎餅……犬男饅頭も半額か……」

店主 「買うなら買ってよ！」

以前二人を怒鳴った年配の通行人が

店番をしている。

亜季男 「ああ、すいません……」

店主 「買わないなら好きに持ってけよ！」

明日香 「え」

店主 「どうせ売れないよ！」

明日香 「気前がいいな……」

亜季男 「気前なのか？」

外から音がして、亜季男が見ると、

軽トラックの荷台に犬男と飼い主の

顔はめパネルを乗せる高校生二人組と、

作業を指示するコブンが目に入る。

コブンは一人で駅舎に入っていく。

○駅舎・改札外待合室

ブツブツ言いながら広告ラックや掲示

板から犬男関連のチラシやポスターを
回収していくコブン。

亜季男「(来て) やあ」

亜季男の声にコブンは動きを止める。

コブン「(振り返って) 亜季男！ 災難だっ
たなあ。体はもう大丈夫なのか？」

亜季男「大丈夫っちゃ大丈夫」

コブン「なによりだ。観光振興課課長として、
いや子を持つ親として、この町から死人は
出したくないからな」

亜季男「何人も死んでるじゃん」

コブン「あいつらは違うんだ」

亜季男「……」

コブン「まだしばらくこの町にいるのか？

なんなら俺が仕事を——」

亜季男「いや、東京に帰るよ。今日帰る」

コブン「そうか。じゃあ、良かったらまた
来てくれ。いつだって歓迎するよ」

コブンは亜季男に笑いかけると、励ま
すように肩を叩いて、丸めたポスター

やチラシを手に駅舎から出て行く。

○駅舎・外

軽トラックに戻っていくコブン。

亜季男が駅舎から走り出てきて、背後から彼にドロップキック。

その様子を呆然と眺めている高校生
バイト二人組。

コブン 「痛ってえな、何するんだよ……！」

亜季男 「ごめん。つい」

コブン 「ごめんじゃねえよごめんで済むなら

警察はいらねえだろテメエはよお！

テメエはそうやって逃げてきたんだよ！

俺はずっとここにいたんだよ！ テメエら

が逃げやがった後もずっとこの町にいたん

だよ！ 今さら謝ってんじゃねえよ！」

コンビニの軒先から、

店主の声 「うるさいよ！」

明日香が口をあんどぐり開けてその光景
を眺めている。

○明日香の車の車内（移動中）

明日香と亜季男が乗っている。

後部座席には亜季男の荷物と各種の
犬男グッズが積まれている。

ウインドウを開けて風を浴びながら
外の景色を眺めている亜季男。

明日香「トゥルースはいつだってつまらない。
だから人はオルタナティブ・トゥルースを
求める。オルタナティブライフを夢見る」

亜季男「なんの話だよ」

ダッシュボードに置かれた〈47〉の
VHSテープを手で叩く明日香。

明日香「君を見習って少しばかり思い出した
よ。こいつは昔アダムスキーで借りたと
言ったな。アダムスキーは珠間町唯一の
ビデオ屋だが、借りるときに店員が言った
んだ、君たちみたいな中学生には、とね。
君たち、とは誰のことだ。俺はその時、
店を出て行くミヤジの姿を一瞬だけ見た」

明日香「今にして思えば彼も借りていたんだ、

同じビデオを」

亜季男「だから何の話よ」

明日香「何の話でもない。ただ思い出した
というだけだ」

間。

亜季男「ユリの花びらが一枚落ちて、かすかな音を響かせた」

○天野家・庭の物置（夜・回想）

ズタ袋に入れられて物置に横たわる

亜季男を、山刀を手にしたミヤジが見下ろしている。

刃先で亜季男の顔を撫でるミヤジ。

刃先が髪に分け入って、切れた髪の毛が一本床に落ちる。

ミヤジ「ユリの花びらが一枚落ちて、かすかな音を響かせた」

胡乱な眼差しでミヤジを見る亜季男。

ミヤジは亜季男に笑いかけると、

扉に鍵をしめて歩き去る。

ミヤジの声「良平ごめん、ちよつと来て」

○明日香の車の車内（昼・移動中）

尻ポケットから『ポッコちゃん』を

取り出す亜季男。

亜季男「あの夜、ミヤジが言ってた。なにか
と思つたら星新一の引用なんだよ。この前
返して貰った本にドッグイヤーが——」

明日香「（本を見て）おい、いま返してもら
ったって言ったか？」

亜季男「なんか中学の頃に俺が貸してたん
だつて。全然覚えてなかったけど」

明日香「ヘユリの花びらが一枚落ちて、かす
かな音を響かせた」。星新一の『月の光』
の一節だ。覚えてなくて当たり前だろう、
それは俺がお前に貸したんだよ！」

亜季男「うそ。そうだっけ」

明日香「ああ……まったく……」

明日香は本を車の外に投げ捨てる。

亜季男 「ええ……普通捨てる？」

明日香 「本は読まれる為にあるんだ。お前が

パクったせいで俺はもう別に持つてる。

そこらのガキの誰かが拾って読むだろ」

呆れた表情の亜季男。

UFO看板が前方に見えてくる。

亜季男 「じゃ、俺もそうするか」

亜季男はポケットからストラップを

取り出すと、そこに向けて放り投げる。

○製材所跡地

草地に落ちるストラップ。

○同（1998年・夜）

そのストラップを誰かが踏む。

踏んだのはガイガーカウンターを手に

した中学生の明日香。

満月の下、中学生の亜季男と田島、

ミヤジとコブンが中学生明日香を先頭

に草地を歩いていく。

中学生明日香「広い方がいいんだ。スピリチュアル・チャネリングは物理的条件はあまり関係ないんだけど、サイエンティク・チャネリングの場合は電波や可視光線の障害になるものは避けた方が望ましい。放射線量を測っているのは、UFOの離着陸後には空間放射線量が高くなると一般的に言われているからで——」

誰かが投げたビールの空き缶が中学生明日香の頭に当たる。一行の笑い声。

中学生明日香は振り返って苦笑いを浮かべる。

中学生ミヤジ「ねえ早くUFO出して」

中学生明日香「いや、宇宙人には宇宙人の意志があるし、それに科学的な問題だから、無理矢理呼び出し出したりは——」

酔った中学生コブンが缶ビール片手に夜空に叫ぶ。

中学生コブン「おーい出てこーい！」

中学生明日香「ほ、本質的には異星生物との
コ、コミュニケーションなんだよ。だから
そういう乱暴な方法だとUFOは——」

中学生ミヤジ「じゃ帰っていいよ」

背後では中学生コブンたちが満月を
見上げて盛り上がっている。

中学生コブン「U・F・O！」

中学生田島「U・F・O！」

タバコに火を点けて、中学生明日香を
無表情に見つめる中学生ミヤジ。

中学生ミヤジ「いいよUFO呼べないなら」

なにも言えず、苦笑する中学生明日香。
やがて彼は半笑いのまま自分を納得さ
せるように頷き、そこから離れていく。

中学生ミヤジ「なんかごめんね」

中学生明日香「（振り向いて）いや、謝る

ことないよ、じゃあね……（独り言）勉強
が足りないな……」

中学生ミヤジ「おい子分、酒」

中学生コブン「あ、はい、すいません」

中学生コブンが缶ビールを持って中学生ミヤジに駆け寄ってくる。

中学生ミヤジ「お前犬かよ」

中学生コブン「（笑顔で）わん、わんわん」

中学生ミヤジは缶ビールを開けて、飲みながら中学生田島と中学生亜季男が手を握って空を眺めているのを見る。中学生亜季男はふと、去り行く中学生明日香に視線を落とす。笑っていた彼の顔からふっと笑みが消える。

亜季男の声「人が故郷を離れるキツカケは色々ある」

中学生コブンが星々に叫ぶ。

中学生コブン「さっさと来やがれ宇宙人！」

他の人間も同調して、

中学生田島「プレアデス星人！」

中学生亜季男「アンゴルモアー！」

中学生ミヤジはビールを飲み干し、缶を満月に向けて投げ捨て、

中学生ミヤジ「わんわん！ わおーん！」

叫び続ける中学生たち。

亜季男の声 「あれは2015年の夏の

ことで、1998年の夏のことだった」

(了)

【引用作品】

藤子・F・不二雄 『間引き』

星新一 『月の光』